Ⅸ　各種データ

１　地域協働カリキュラム推進委員会報告

（１）委員会設置の趣旨

本委員会は校長、教頭、本事業研究担当、教務主任、進路指導主事、各学年キャリア教育担当、各系列代表、カリキュラム開発等専門家、地域協働学習実施支援員で構成し、本事業の運営方法や指導案等を検討する。そして、対話力・追究力・創造力・発信力を見に付けていける地域課題解決型キャリア教育のカリキュラム開発、評価、改善提案を行っていく。

＜本年度の委員会構成：12 名＞

土方 清裕（校長）、入江 昇（教頭）、
多賀 秀徳（本事業研究担当 兼 教務主任 兼 総合進学系列代表）、
坂元 利孝（１学年キャリア教育担当 兼 郷土・環境系列代表）、
中村 裕介（２学年キャリア教育担当 兼 コンピュータ系列代表）、
堀口 有紀子（３学年キャリア教育担当）、杉野 直樹（介護福祉系列代表）、
栗谷 英樹（進路指導主事）、
横山 陽子、高杉 亮（以上、地域協働学習実施支援員）、
江森 真矢子、浅野 吉英（以上、カリキュラム開発等専門家）

（２）活動報告（報告事項は除く）

①第１回委員会（１０月２３日）・・・オンライン開催

まず校長より、国の事業が１年半経って、自走し始めた生徒が出てき始めたことが共有された。その特徴として、学校外の大人の方が伴走している共通点があると説明があった。そして、今年度１０月から松阪市２人目の地域おこし協力隊として、高杉亮氏が加わってさらに広がりが出てくるとの意見があった（今委員会より地域協働学習実施支援員として高杉氏が参加）。

次に、第２回フィールドワークの昨年度との変更点と、いいなんゼミの方向性について協議された。フィールドワークについては、７月に行った第１回と同じ地区を同じグループで深め、大人から与えられるテーマではなく、自分たちで地域を掘り下げる活動を進めるとの作業部会提案があった。そして１学年主任から、これまでの事前学習で生徒たちはグループごとに具体的な目的地や出会う人を決定し、校長や本校教員、あるいは振興局長へ電話をして、当日出向く地域や大人へのアポイントをとってきたとの報告があった。昨年度は地域や当日出会う大人を本校教員が全てセッティングしてきたため、ある程度生徒の活動が想定された。今年度は当日何が出るか分からない状況で不安もあるが、生徒が主体的に動いてくれる期待感があるとの意見が出た。

いいなんゼミについては、今年度４，５月が臨時休業期間となり密を避けるという制約もあって、なかなか進んでいない状況にあるとの報告があった。今年度の報

告書の書式をどうするのか協議があり、昨年度のように見やすいデザインにするのか、これまでの研究書のような形にするのかで議論となった。相互のメリット・デメリットの意見共有が図られたのち、レイアウトにこだわるのではなく生徒の活動に視点が置かれた、生徒の活動プロセスが見える形になっていることが大切との意見が出た。また、スキルとして今後に活かせる形にもしていきたいとの声もあり、今後作業部会でも検討していくこととなった。

②第２回委員会（１月７日）・・・オンライン開催

今回はまず、翌月に開催されるいいなんゼミ発表会について協議された。作業部会で何度も検討されてきたが、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、会場を分散してオンライン配信も行うことを確認した。オンライン配信の技術面は業者に入ってもらい、生徒は例年通りの雰囲気で感染リスクをなるべく避けながら実施することとした。例年であれば連携中学校生徒も会場で参観する形であるが、今年度はオンライン配信あるいは出前いいなんゼミで対応することを中高交流委員会で決定してもらうこととなった。

会場を分散して開催するため、例年いいなんゼミ当日に行っているポスターセッション・作品展示の日程についても協議された。協議の結果、発表会前々日の２月８日３～５限に実施し、１限あたり２クラス参観で行うこととなった。ポスターセッションに関しては、気軽にやりとりできる場となればいい、発表の途中でも質問できるというルールがあると発表者に揺さぶりがかかり成長につながる、といった意見が出た。

その他、研究開発実施報告書の役割分担や次年度申請書についても意見共有を行った。また、高杉氏より「教室から世界一周」の案内があった。

２　作業部会報告

（１）作業部会設置の趣旨

地域協働カリキュラム推進委員会メンバーの日程調整が難しく、委員会の毎月開催は厳しいため、昨年度より「作業部会」を授業時間内に開催している。今年度は主に、「産業社会と人間」や「キャリアデザイン」の計画案について検討する予定であったが、「いいなんゼミ」発表会の方法についても大まかな検討を行った。

（２）活動報告

①第１回作業部会（６月１７日３，４限）

・第１回フィールドワークについて
　事前学習の様子や今後の予定の共有、昨年度反省を踏まえた変更点を協議
・キャリアデザインの計画変更について
　８月キャリアインターンシップの構想、プレいいなんゼミの日程調整
・いいなんゼミについて
　臨時休業期間の影響と中間発表の方向性を検討

②第２回作業部会（６月２２日６限）

・キャリアインターンシップおよび企業説明会について
　　オンラインが可能かどうか検討

・いいなんゼミ発表会のオンライン配信および中間発表について

③第３回作業部会（７月１日３，４限）・・・オンライン開催

・第１回フィールドワーク事前学習の進捗状況について
　　既存の視点だけにならず、自分なりの目線で感じることを共有

・本気の大人講演会の目的を共有

・キャリアインターンシップの受入先を協議

④第４回作業部会（７月２９日３，４限）・・・オンライン開催

・第１回フィールドワークおよび魅力マップ作成の様子を共有

・第２回フィールドワーク内容について協議

・他校の地域探究科目の内容を共有

⑤第５回作業部会（８月２５日１４：００～）・・・オンライン開催

・地域でのキャリアインターンシップの進捗状況について
　　生徒３０名の活動と、企業側のインターンシップ受入の課題を共有
　　振り返り方法や企業へのフィードバックについて検討

・いいなんゼミにおける外部講師について
　　本気の大人を伴走者として繋いでいく必要性を共有

⑥第６回作業部会（１０月７日３，４限）

・第２回フィールドワークについて
　　昨年度からの変更点を確認、冊子内容を検討
　　問いを立てる学習をどう持っていくのか検討

・キャリアインターンシップ発表会の運営について協議
　　視点を持った質疑応答および評価の方法について検討

・本気の大人講演会について
　　事前学習に使用する冊子について協議

・いいなんゼミについて意見交換
　　ゼミ担当者会議の必要性を共有

⑦第７回作業部会（１１月２日６限）

・いいなんゼミ報告書の様式について
　　第１回地域協働カリキュラム推進委員会からの継続協議

⑧第８回作業部会（１１月３０日１３：３０～）

・いいなんゼミ発表会について
　　生徒全員で役割を分担して創り上げることを再確認
　　ゼミ担当者会議（１１月１６日）での課題を共有し検討

⑨第９回作業部会（２月１７日３限）

・各学年冊子の様式について
　　今年度の使用状況や改善点を協議

・キャリアパスポートと産業社会と人間等の各科目との接続について検討

３　「地域との協働」を考えるアンケート

（１）アンケートの趣旨

本事業における管理機関（三重県教育委員会）は、卒業までに生徒に習得させる具体的能力の定着状況を測るものとして、地域協働推進校となる本校等と協議の上で事業を通じて実現する成果目標を設定した。この目標を測るため、学期ごと（１学期７月、２学期 12 月、３学期３月）にアンケートを行うものである。

（２）質問文と選択肢

次の８つについて質問し、問１～問６については４段階評価を行い、問７，８については以下のような選択肢で５段階評価を行った。いずれも数値が低いほど低評価、高いほど高評価となっている。なお、「地域」と設問に記載すると、学校活動全体で力が身に付いたかどうか計ることができないのではないか、という意見があった。それは本意ではないため、今年度は問１～４において「地域」という言葉を外して質問した。当初の設問は、以下のように括弧書きで残した。

問１：（地域の人々と対話する際、）相手の思いや考えを理解しながら聴いたり、自分の知りたいことを詳しく尋ねたりする力は身に付きましたか。

問２：（地域の産業などについて）詳しく調べたり、課題や改善点を発見したりする力は身に付きましたか。

問３：仲間とともに、（地域課題の解決に向けた）取組や活動を考えたり、実行したりする力は身に付きましたか。

問４：（地域課題を解決するための）具体的な考えや提案を、地域の人々をはじめとした様々な人によくわかってもらえるように伝える（プレゼンする）力は身に付きましたか。

問５：将来的に松阪市に住みたいと考えていますか。

問６：将来的に飯南・飯高地域に住みたいと考えていますか。

問７：今現在あなたの飯南・飯高地域への「愛着や関心」について回答してください。

１．飯南・飯高地域だけに特別の愛着や関心はない
２．飯南・飯高地域だけに特別の愛着や関心はないが、地域のことを知れば変わると思う
３．飯南・飯高地域に愛着や関心があり今後もその傾向に変わりはないと思う
４．飯南・飯高地域に愛着や関心があり、さらに地域の産業や文化、歴史などを学んでみたい
５．飯南・飯高地域に愛着や関心があり、将来は自分が地域をより良い方向に変えていきたい

問８：今現在のあなたの「挑戦力」について回答してください。

１．何かに挑戦することは、好きではなく、できる限りさけている
２．何かに挑戦することは、あまり好きではない
３．何かに挑戦することは、好きでも嫌いでもなく、必要であれば挑戦する
４．何かに挑戦することは、どちらかといえば好きである
５．何かに挑戦することは好きであり、少々の失敗を覚悟のうえで挑戦できる

（３）目標値

①対話力・追究力・創造力・発信力の４つの能力が身に付いたと考える生徒の割合

→問１「対話力」、問２「追究力」、問３「創造力」、問４「発信力」に該当

⇒目標値：肯定的回答の割合がいずれも 85％以上

②将来的に松阪市に住みたいと考える生徒の割合

→問５に該当

⇒目標値：90％以上

③将来的に飯南・飯高地域に住みたいと考える生徒の人数

→問６に該当

⇒目標値：20 名以上

④「地域アイデンティティ」と「アントレプレナーシップ」に関する自己評価における肯定的評価（第４段階以上）の割合

→問７，８に該当

⇒目標値：３年生の年度末評価において、第４段階以上の割合が 80％以上

（４）結果データ

次のデータは、昨年度（１学期７月、２学期 12 月、３学期３月に）と今年度（１学期７月、２学期 12 月）に実施したアンケートの結果である。各項目は上述した（３）目標値に対応し、それぞれ全体に対する割合（％）と人数（斜体）で示している。実施当初から 10 ポイント以上上昇した数値については、太字で表記した。

注１）「①全て」は、４つの力全てが身に付いたと回答した生徒割合

注２）「①全て人数」は、４つの力全てが身に付いたと回答した生徒人数

注３）「④地域」は、「地域アイデンティティ」について第４段階以上の割合

注４）「④アントレ」は、「アントレプレナーシップ」について第４段階以上の割合

注５）アンケート回答数は１学年 75 名、２学年 78 名、３学年 76 名（一部無回答あり）

＜1学年＞

項目	20 年 1学期(D)	20 年 2学期(E)	E－D
①対話力	85.1	80.0	−5.10
①追究力	75.7	69.3	−6.34
①創造力	86.5	80.0	−6.49
①発信力	48.6	58.7	**10. 02**
①全て	37.8	44.0	6.16
①全て人数	*28 人*	*33 人*	*5 人*
②	55.7	53.4	−2.29
③	*9 人*	*9 人*	*0 人*
④地域	16.9	8.2	−8.68
④アントレ	42.3	43.8	1.58

＜2学年＞

項目	19 年 1学期(A)	19 年 2学期(B)	19 年 3学期(C)	20 年 1学期(D)	20 年 2学期(E)	E－A
①対話力	58.2	73.7	76.0	76.4	80.8	**22. 54**
①追究力	59.5	61.3	86.7	80.6	76.6	**17. 13**
①創造力	65.8	64.5	77.3	75.0	71.8	5.97
①発信力	41.3	60.0	76.0	58.3	76.6	**35. 29**
①全て	29.3	37.3	49.3	41.7	46.8	**17. 42**
①全て人数	*22 人*	*28 人*	*37 人*	*30 人*	*36 人*	***14人***
②	55.1	47.2	56.3	53.5	58.7	3.54
③	*15 人*	*10 人*	*18 人*	*8 人*	*10 人*	*-5 人*
④地域	13.2	14.1	29.2	15.5	13.3	0.18
④アントレ	35.4	37.0	51.4	45.1	44.0	8.56

＜3学年＞

項目	19 年 1学期(A)	19 年 2学期(B)	19 年 3学期(C)	20 年 1学期(D)	20 年 2学期(E)	E－A
①対話力	51.3	49.4	64.9	77.3	72.4	**21. 05**
①追究力	47.4	49.4	61.0	78.7	80.0	**32. 63**
①創造力	50.6	57.1	62.3	68.0	76.3	**25. 67**
①発信力	35.5	44.2	52.0	53.3	63.2	**27. 63**
①全て	14.5	18.2	26.7	28.0	38.7	**24. 19**
①全て人数	*11 人*	*14 人*	*20 人*	*21 人*	*29 人*	***18人***
②	65.3	65.8	62.7	62.5	58.7	-6.67
③	*16 人*	*12 人*	*14 人*	*11 人*	*10 人*	*-6 人*
④地域	12.3	16.0	14.7	6.8	9.5	-2.87
④アントレ	43.2	32.9	42.7	50.0	37.3	-5.91

まず、昨年度からこの事業を継続している２学年のデータを見ると、「対話力・追究力・創造力・発信力の４つの能力が身に付いたと考える生徒の割合」は、１年１学期 29.3%（22 人）→２年２学期 46.8%（36 人）と上昇した。目標値は 85%以上で現状は遠く及ばないものの、４つの力すべてが身に付いたと実感する生徒が増加している。また、４つの力を個別に見ても、対話力 22.54%増（80.8%）、追究力 17.13%増（76.6%）、創造力 5.97%増（71.8%）、発信力 35.29%増（76.6%）と、高い数値で向上していることがわかる。特に対話力および発信力については、プレゼン発表をする時間が「産業社会と人間」と「キャリアデザイン」においてはほぼ毎学期、さらには系列の授業でも何度かあり、その活動を通じて力が身に付いたと考えられる。そして生徒アンケートからは、「これから必要になってくる力」と肯定的に捉えていることもわかる。全体的な傾向として、１年３学期から２年１学期に

かけて数値は減少するが、オンライン授業は行われたものの、臨時休業期間で学校活動が断絶したことが影響しているのかもしれない。

この校内での４つの力に関するデータについては、三菱ＵＦＪリサーチ＆コンサルティングが行った「高校魅力化アンケート」の結果からも同様のことが言える。このアンケートにある学習活動（明示的なカリキュラム）、生徒の自己認識（資質・能力の主観的認識）、生徒の行動実績（資質・能力の発揮）に関する 51 項目のすべてが昨年度より上昇している。特に、「友達の前で自分の意見を発表することは得意だ」の項目では、47.9％の生徒が昨年度より上昇したと回答しており、発信力との親和性がある。また、「地域をよりよくするため、地域の問題に関わりたい」の項目で 40.8％の生徒が上昇回答していることは、これまでの校外を学びの場とした活動が地域社会に参画する意識を高めていると考えられる。

一方で、「将来的に松阪市に住みたいと考える生徒の割合」は横ばい（55.1％→58.7）であり、「将来的に飯南・飯高地域に住みたいと考える生徒の人数」は 15 人から 10 人と減少した。さらに、地域アイデンティティの項目も 13.2％→14.1％→29.2％→15.5％→13.3％と減少傾向にある。生徒の記述からは、「まだこの地域についてあまり知らない」や「もっと知りたい」といった肯定的な意見を持ちながらも数値が低い生徒は見受けられるが、「興味がない」や「関心がない」といった意見も少なからずあった。地域社会に参画したいという意識は高まったといえるが、飯南・飯高地域を一層学んでみたい、より良い方向に変えていきたいという考えまでには至っていないと言える。生徒の成長の高まりという本質的な部分で事業の取組は成功していると言えるものの、地域への愛着や関心の向上には繋がっていないところは今後の課題である。

他学年との比較をしてみると、今年度２学期の段階では３学年とほぼ同様の数値であることがわかる。この学年は「産業社会と人間」「キャリアデザイン」「いいなんゼミ」をバージョンアップする事業対象学年ではないため、本校の３つの柱を改良していくことは、生徒の成長の実感にも結びついていると考えられる。そして地域アイデンティティについては、２学年 13.3％に対して３学年は 9.5％であることを考えると、地域を学び場とする活動については一定の成果があると言えるかもしれない。また１学年については、すでに１学期当初から高い数値を示しており、２学期で発信力以外は減少するものの高水準を保っている。このことは「高校魅力化アンケート」からもわかり、51 項目中 42 項目で昨年度１年生より高い数値である。昨年度バージョンアップした「産業社会と人間」から、今年度はさらに進化を進めている。今後２学年とどのように変化が見られるのか分析していく必要がある。

以上より、本事業を取り組みながら地域を学び場にして活動することで、生徒の成長は１年間で飛躍的に向上が見られたと考えられる。地域への愛着や関心の向上に繋がっていない部分は課題ではあるが、来年度３年生は本校の集大成である「いいなんゼミ」において自己の在り方・生き方を見つめながら、４つの力をさらに向上させていきたい。

Ⅹ　新聞報道

２０２０年７月２３日【中日新聞】「キャリアデザイン」

「本気の大人講演会」自然養鶏農園 亀成園　成岡真清さん

「迷った時こそ大きく動いて」

亀成園の成岡さん 飯南高で講演

講演する成岡真清さん＝松阪市の飯南高で

四年前に移住した松阪市飯高町森で、夫の成岡篤史さん(四〇)と自然養鶏農園「亀成園」を営む真清さん(三七)の講演会が二十二日、飯南高校で開かれた。キャリア学習の一環で、二年生七十九人が耳を傾けた。

真清さんは大阪府生まれ。京大在学中に国内外を旅行し、飯高地域も訪れた。結婚後は篤史さんの海外転勤などに連れ添い、四人の子どもを育ててきた。その後、自給自足の生活や、農薬や機械を使わない農業に関心があり、家族で移住した。地域の交流人口を増やそうと、四月にゲストハウスの運営も始めた。

真清さんは、亀成園の立ち上げ時、畑の野菜に虫がつかないようにしたり、獣害から鶏を守ったりと工夫が必要で「多くの課題があったが、できることを一つ一つやった」と振り返った。今後の夢として、地域の自然や生物を守ることを挙げ「誰かが動けばまわりも動く。迷った時こそ大きく動いて」と呼び掛けた。

中野由翔さん(一七)は「将来は都会で働こうと思っていたが、田舎でゆったりと暮らすのも良いなと思った。自分の道をよく考えていきたい」と話していた。

（清水悠莉子）

２０２０年１１月２１日【夕刊三重】「文化祭実行委員会」

文化祭の中夜祭での打ち上げ花火を企画

夕刊三重　2020年（令和２年）11月21日　土曜日　第20032号

熱い思い、夜空に

飯南高　文化祭で打ち上げ花火

寄付募り花火師招く

企画や手続き　全て生徒たちで

「目標に向け、協力し合えた」

生徒たちの企画で、夜空に打ち上がった花火＝飯南町粥見の飯南高で

松阪市飯南町粥見の県立飯南高校（土方潤裕校長、233人）で20、21の両日、文化祭が行われ、初日夕方からの「中夜祭」の中で、花火師を招いて打ち上げ花火を実施した。資金集めや関係機関への手続きなどは、全て生徒たちで行い、実現した初めての取り組み。秋の夜空に咲いた大輪を皆で見上げて、高校生活の貴重な思い出にした。

新型コロナウイルスの影響で多くの行事が中止となってしまった今年、文化祭で思い出に残ることがしたいと考え、「花火がしたい」と教諭に直訴したところ、「やってみなさい」と後押しを受け、準備をスタートした。

これまでにも飯南・飯高地域で花火を打ち上げてきた伊勢市の㈲辻煙火店に、SNSを通じて「お金をためたら花火を上げてくれますか」などと相談。10月中旬ごろに一度会い熱意を伝えたところ、地域活性化のために、10万円で快く引き受けてもらえたという。

しかし、高校生にそんな大金を用意することは難しいため、文化祭実行委員会花火班（イノビオミツコ班長）の8人を中心に、11月に入ってから寄付を募り始めた。登下校時に昇降口に立って、生徒や教職員に呼び掛けたり、学校周辺の地域住民などから受け付けたりして約7万円を集めた。寄付してくれた人には100円につき線香花火1本と実行委からのメッセージカードを返礼品として渡した。費用は後払いのため、今後も寄付を募っていくという。

また花火を開催するために市役所や松阪地区広域消防組合、松阪署など関係機関への手続きも生徒たちだけで行った。

この日、舞台発表などを日中に行い、夕方から「中夜祭」を開催。キャンプファイアなどを行った後、午後5時ごろから、野球場に集まった生徒たち全員でカウントダウンを行い、「ゼロ」と同時に花火が打ち上げられた。スマイルマークからハート形に変化するものなど約200発が約5分間、次々と打ち上げられ、生徒たちからは「きれい」や「最高」などと喜ぶ声が上がった。

イノビオ班長（3年）は「例年にないことをして、みんなに喜んでもらい、思い出に残る文化祭にしたい一心でした。最初は実行できるか不安でしたが、一つの目標に向かって協力してやればできることを学べた。これからも大変なことが多いと思うが、そのたびに力を合わせて乗り越えていきたい」と充実した表情で話した。

辻煙火店の辻篤さん(36)は「生徒たちの熱い思いや期待に応えたいという一心で引き受けさせてもらった。今日が高校生たちにとって、花火のように輝く思い出となってくれればうれしい」と話した。

２０２１年２月１７日【中日新聞】「いいなんゼミ」

いいなんゼミ発表会

中日新聞　2021年（令和３年）2月17日（水曜日）

飯南高３年生「いいなんゼミ」発表会

地域課題を若者視点で

松阪市の飯南高校の三年生が、地域課題の解決など自分で設定したテーマを研究する「いいなんゼミ」の発表会が、市飯南産業文化センターで開かれた。自分の進路に関する話題や、授業を通して抱いた疑問について、校内選考を経た八人が若者視点の考えやアイデアをプレゼンテーションした。（望月海希）

研究内容をプレゼンテーションする生徒＝松阪市飯南産業文化センターで

ゼミは総合学習の一環。毎年、発表会を開いており今回二十回目。二〇二〇年度は三年生七十八人が休校明けの昨年六月から取り組んできた。十日にあった発表会には、一、三年生や保護者ら百九十人が出席。二年生は新型コロナウイルス感染拡大防止のためオンラインで参加した。

社会福祉士を目指す沢村芽里衣さん（二）は、老人ホームでのアルバイト経験から着想を得て「理想の介護施設を考える」と題して発表した。

高齢者にとって理想的な住居やケアについて、住宅展示場を訪れたり、同級生の祖父母らにアンケートしたりして考察。

進路や抱いた疑問も考える

「家族との面会や自由な外出が生きがいになっていると分かった」という。

研究では「施設にいながら、家にいるように暮らせる施設が理想的」と結論づけた。新型コロナ禍で面会が難しい中でも、ビデオ通話アプリなどを活用することで、家にいる感覚に近づけられると締めくくった。

他には、映画監督小津安二郎を題材に紙芝居を作って地域にゆかりのある偉人を学んだ生徒や、証券会社の社員にアドバイスを受けながら、シミュレーションアプリを用いて株取引を体験した生徒もいた。

終了後、オンラインで視聴していた県教委の担当者は「知識の詰め込みだけでは社会に対応できない。学びを継続して次につなげて」と講評した。

土方清裕校長（五七）は「休校もあって短い期間の中、主体的に取り組んでいた。学外の人とつながり、考えを深めていたのが良かった」と話した。

文部科学省指定事業
令和元年度採択
地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）
研究開発実施報告書・第２年次

令和３年３月発行
発行者　三重県立飯南高等学校
〒515-1411　三重県松阪市飯南町粥見 5480-1
TEL:0598-32-2203
FAX:0598-32-2204
http://www.mie-c.ed.jp/hiinan/

三重県立飯南高等学校